

Hopp

紛争地から見えてくるもの

ジャーナリスト 玉本英子さんに聞く

平成29(2017)年11月、映像ジャーナリストの玉本英子さんを迎えて、トークイベントと写真展を開催しました。玉本さんは、過激派組織「イスラム国(IS)」占領下のイラクを長年にわたり取材され、人々の日常の暮らしが破壊される現状や、紛争に共通する構図などを伝えておられます。

20年間、紛争の現場に通い続ける玉本さんに、マスコミ報道では知ることができないイラクの現状やご自身がジャーナリストになったきっかけ、生き方などについてお聞きしました。

OLからジャーナリストに

絵が好きだったので、大学卒業後に新大阪のデザイン事務所に入り、パンやケーキのポスターを作っていました。1990年代、バブルの終わり頃です。

ある日、ドイツで一人の男性が自分の体にガソリンをかぶり、機動隊に突込むというニュース映像を見たんです。こんな楽しい時代に自分の体に火をつけるなんて、とびつくりして。彼はトルコ出身のクルド人(※次頁末尾に注)で、故郷でクルド住民が抑圧されていることに抗議しての行動でした。彼らのことが気になって、半年後にヨーロッパに行きました。

オランダのクルド人が集まるカフェに通っていたある日、テレビで見たあの男性と偶然出会ったのです。私が「なぜあんなことをしたのですか」と聞くと、彼は「自分と同じ経験をしたら君も同じことをするよ」と言いま

した。肌はピンク色にむけ、鋭い目、細い体で握手したら手が冷たくて。現地では何が起きたのか知りたいと思いました。

その後、彼の故郷のトルコを訪れました。クルドゲリラとトルコ軍が戦闘を展開していて、クルド人は拷問などの弾圧を受けていました。こうした現実を目の当たりにして「広く伝えるべきだ」と思い、私は記者になろうと考え始めたのです。

(中面に続く)

玉本英子さん◆アジアプレス所属。イラク、シリア、コソボ、レバノン、アフガニスタンなどを取材し、テレビや新聞、講演を通して伝えている。H29(2017)年ギャラクシー賞報道活動部門最優秀賞を受賞。大阪府豊能町在住。趣味は食べること。



女性のための相談

家族のことや職場の人間関係、孤独や不安など女性が抱えるさまざまな悩みについて、相談員と一緒に考え解決に向けてお手伝いします(プライバシーは厳守します)

● 専門相談員による相談

面談または電話(要予約)、無料
火・水・木 12~15時(50分×3枠)
予約電話 759-1856

● カウンセリング・グループによる相談

電話のみ(予約不要)、無料
月・金 10~12時(最長50分)
相談専用電話 759-1857

女性のための

チャレンジ相談

兵庫県
と共催

“何か”を始めてみたい人へ

● キャリアカウンセラーによる相談

面談(要予約)、無料
第4火曜日 13~16時(50分×3枠)
無料の保育あり(要事前申し込み)
予約電話 759-1856

被害者が加害者になる構図

分け隔てのない取材で 傍観者ではない視点を持つ

撮影のイロハや記事の書き方を学び、自分の視点を見極めるためにすごく勉強しました。現地でカメラを回して取材し、帰国したらメディアに提案する。発表できれば報酬につながりますが、取材費用は今もすべて持ち出しです。数年前まではアルバイトをしてやりくりしていました。

—2014年、ISはイラク北西部に住む少数宗教ヤズディの人たちを弾圧。住民が虐殺され、数千人の女性が拉致されて奴隷として売られた。玉本さんも被害の実態を取材。多くの友人やその家族が殺害されたり、避難民になったりしていた。—

戦争や紛争地で学んだのは、加害者と言われる人たちは実は被害者だったことです。たとえばISはイラクのヤズディ教徒を殺したり性奴隷にしたりして迫害しています。でもISの戦闘員も数ヶ月前までは、お母さんが拷問されたなどの恨みを持っている、あるいは家族を養わなければならないなど、普通の一般市民で、弱者なのです。そういう部分をきちっと見ていくために、分け隔てのない取材を心がけています。

大国が武器を売ってその国を利用しているという見方もあります。それは事実ですが、その視点だけで傍観者として見ていると問題が他人ごとになってしまう。私はそれが一番怖い。「自分たちも加害者になり得る」ことを、私たちがいかに認識するかが大事だと思っています。

忘れられないエピソード

2006年、イラクのアルビルという街で、警察官の面接試験を受ける若者たちの列に自爆犯が突っ込み100人以上が死傷する事件がありました。直後に取材に行くと、血が海のように道路に流れ、人の遺体があつて。その時は本当につらかった。

気が動転しながらも、自分で頬の肉をグワーってかんで「泣いてはいけない、ちゃんと記録せなあかん」って、必死で撮影しました。

現地の男性記者が泣いていて、その人の背中ひっぱきました。「アホかー、泣くなー、涙がうつるやろー」って。彼は「何で外国人にたたかれなあかんねん」って思ったかもしれませんね(笑)。



ISとイラク軍の戦闘中、夫を殺された女性。5人の子どもが残された(撮影:玉本さん、2017年モスル)。「取材で取りこぼされがちな普通のおばちゃんや子どもをフォローしていきたい」と玉本さん。



写真展には「私は戦争をしりませんが、どれだけ大変か、かなしいか、わかりました」など多くの感想が寄せられました。

大事ななのは「能力」より「気持ち」

—好きな仕事を続けるために必要なことは？

やっぱり経済的なことは大きいと思います。私が若かった時代は景気が良かった。今、日本では貧困家庭が増えているし、何か始めようとしても難しいことがあるかもしれません。ただ、それだけを理由に「もうだめだ」「この年齢だから」と、すぐにあきらめるのは、もったいない。

大学で教えるときには、めざす企業に就職できない学生にいつも言うんです。今チャレンジしてだめでも、いつかチャンスが巡ってくる。その時に自分が「えいやっ」ってがんばれるかどうか大事だから、と。

私もあんまり偉そうなこと言えないんですけど(笑)。今日、明日、今日、明日のくりかえし。ああ玉本さんはこうやねんな、とってください。

※クルド人は「国を持たない最大の民族」と言われ、シリア、イラク、トルコの山岳地帯などで約2,500万人から3,000万人が生活している。

*この記事は市民リポーターの濱崎輝さんに取材&作成していただきました。

